

訃報 横山榮二先生を偲ぶ

本学会の設立、学会の発展に貢献された名誉会員の横山榮二先生が、2019年（令和元年）10月5日に享年90歳でご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り致します。

先生は、昭和29年東京大学医学部をご卒業され、同大学付属病院第2内科に勤務後、昭和35年国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）から招聘され、大気汚染の健康影響の研究の分野に入られました。特に大気汚染と上気道疾患との関係の調査やSO₂の曝露実験による生体影響などを精力的に研究され、また後年には有害物質の健康影響評価にリスク概念とリスクマネジメント手法を提唱されました。先生のこれらの研究業績は世界的に高い評価を得ています。またこの間にアメリカハーバード大学公衆衛生大学院生理学部、ワシントン大学公衆衛生大学院環境保健学部留学され広く研鑽を積まれています。

わが国は昭和30年代から、工業化と高度成長期を迎え、大量の化石燃料使用により、大都市を中心に大気汚染が悪化し、その影響により呼吸器系の健康障害が多発し、社会的に関心が高まり、先生は関連ガス成分の生体影響研究を精力的になされました。その業績で1986年度（昭和61年度）に斎藤潔賞を受賞されました。大気汚染の生体影響を中心に研究される中で、大気汚染物質の環境基準の策定など環境行政にも大きな役割をなされています。

このように大気汚染研究などが行なわれる中で、わが国の生活様式が従来の開放型から欧米の閉鎖型に変わり、日常生活の大半を建築物の中で過ごすことによる健康影響問題が発生し、シックビルディング症候群として社会的に注目されてきました。この問題を学際的に解明するために、大気環境学会の中で室内汚染などを研究した研究者が中心になり、1993年12月に室内環境学会設立準備委員会が立ち上がりました。1994年9月に正式に室内環境研究会（現室内環境学会）の設立総会が行われ、横山榮二先生はその総会の中で設立記念講演者の一人となられ、室内環境学会では助言と激励を頂きました。1994年9月の室内環境研究会ニュース「創刊号」の中に、先生は室内環境研究会の設立のお祝いとお願いをなされています。その内容は、「室内環境の主たる因子は温度・照明・騒音・空気質であり、それらが相互に微妙に影響し合っている。今後求められる方向性は、学問的に各因子を総合した室内環境に関するComprehensiveな研究であると考え、本研究会もその様な方向を目指していると信じる。なおIn doorとOut doorでは、その対策には基本的に相違があるが、住民の健康と言う観点からは両者は不可分である」この様に室内環境研究に対して示唆に富むお言葉を頂いています。その時期、先生は大気環境学会関東支部支長をなされており、聞くところによりますと、大気環境学会と室内環境学会がお互い協力して研究を行ってほしいと希望されたそうです。多く学会では専門の研究者が減少する中で、室内環境学会の会員は現在500人を越し、設立時に比べて1.7倍程度の増加があり、先生の助言や激励が影響をしているような思いです。

横山榮二先生との個人的な接点は、恩師の故松下秀鶴先生の関係が主なので、学会ではよくお声をかけていただきました。特に、私が2001年北九州市で大気環境学会の年会長として開催するに当たり、心配されて学会に参加されたこと、いろいろと助言を頂いたこと、先生との食事では親しくお話しできたこと、また先生の叙勲のお祝いが帝国ホテルで開催され、その時に出席した思い出も今でも脳裏に残っています。

先生はお酒が好きで、面倒見がよく明るく豪快な方でした。なお、追悼文を書くに当たり、親しくされた多くの方々に貴重なお話を頂きました。ここに感謝申し上げます。先生のご冥福を心からお祈りします。

（嵐谷奎一・産業医科大学名誉教授）